「主体性」が生まれるとき

雪の朝となりました。生徒たちが滑らなければいいけど、と心配しながら、雪景色にワクワクする気もちも心の隅に生まれます。雪には不思議な力がありますね。

私は雪を見ると、あることを思い出します。瑞浪北中のことではありませんが、許してください。

私が以前勤めていた中津川市のある中学校の話です。中津川市は瑞浪市よりよく雪が降ります。同じ東濃の中の市でも、ずいぶん違います。瑞浪市で雪が降っていなくても、中津川市では前が見えないくらい降っていたということも何度かありました。

夜のうちに、雪が降り積もったある朝、学校に到着すると、生徒たちと教師が校舎の周りを雪かきしていました。そして、よく見ると、学校に隣接する建物の周りにもジャージ姿がちらほらありました。そうです。生徒が隣の建物の周りの雪かきをしていたのです。

その学校の隣には、デイサービスセンターがあり、毎日地域のお年寄りたちがやってきます。多くの方が車での送迎でやってきますが、歩きでやってくる近所のお年寄りが滑っては危険だと、生徒たちが進んで雪かきに取り組んだようです。

その姿があってから、学校とデイサービスセンターの間にはかかわりが生まれました。外掃除の生徒たちが、冬場の掃除にデイサービスセンターに行きたいと言ってきたのです。落ち葉も掃き尽くしましたし、移動に時間はかかりません。私は生徒たちの提案をセンターの職員に話し、掃除に行かせてもよいか尋ねました。

返事はOK。それどころか、至極感謝されました。蛍光灯の吹き掃除、建物の外側からの窓ふき、車いすの汚れ取りなどに生徒たちは取り組みました。毎日十分程度の掃除でしたが、担当の生徒たちは、昼休みが終わるころになると、デイサービスセンターに走って向かっていました。

かかわりはまだありました。夏の日差しを遮る木陰で、お年寄りたちがベンチに座り、紅白の鉢巻きを付けて、体育祭の練習に取り組む生徒たちを応援してくれたのです。リレーの練習になると、お年寄りたちに手を振って走る生徒がいました。その度に、お年寄りたちは手作りの旗を振って声援を送ってくれました。孫ぐらいの年齢の若者が生き生きと動き回る光景は、お年寄りたちの大きな楽しみになったようです。

今日書いたことは、学校の隣にそういう施設があったからできた特殊な例だと思わないでください。「主体性」が生まれるときというのは、特別なときではありません。身の周りの中に「主体性」を発揮できるチャンスが必ずあるはずです。それを瑞浪北中の皆さんにもどんどんみつけほしい、と願っています。

（一月十三日　記）